

## 完全自習教材(冊子)による情報リテラシー教育

2 X - 1

田中 真由美 松井 由佳子

神戸女子短期大学

### 1. はじめに

コンピュータの初期実習のために自習形式のテキスト(冊子)を作成し、先生による説明をほとんど行わない授業を行った。この授業での先生の役割は、その場で各学生の実習結果を確認していくことと、学生が実習中に起こすトラブルの処理である。この研究では授業の進め方とその結果について報告する。

### 2. 授業の進め方

半年間の実習の目標は、資料から理解する力を養うことと、簡単なファイル操作、タイピングの基礎、ワープロ検定3級の技巧問題(ビジネス文書)をできることとした。

自習教材として20ページ前後のテキスト(冊子:B5)9冊と進度確認カードを用意し、最初の授業で第1冊と進度確認カードを配布し実習を始める。テキストは初心者を対象とし、電源の入れ方、キーやマウスの使い方なども含む。テキストにそって小項目ごとに分けた課題ファイルを用意しておく。学生には最初のページからすべてをとばさずに読んでいくことを要求する。最後の授業ではテキストをもとにした技巧試験を行う。

学生はテキストにそって課題ファイルの中の問題を実習したり、新しいファイルを作ったり

する。テキストには小項目ごとに確認の場所があり、そこまで進むと手を挙げて先生に内容確認を行ってもらい、できているとシールを進路確認カードに受け次の課題に進む。

タイピングは空き時間に自分で練習させ、授業中に何度か試験を行う。出来によって段階分けした評価シールを進度確認カードに貼る。試験内容や日程、合格基準などは予告しておく。

### 3. 自習形式で行うための留意点

- (1) 2冊目以降のテキストは一斉に配布せず、終わった学生から順にわたす。
- (2) 1冊のテキスト内は小項目に分け、少し進むごとに確認シールを貼ることで達成感を得られるようとする。
- (3) 課題ファイルの中を素早く確認できる工夫をした。例えば、
  - ・文字列削除や行単位の移動などは正しくできると一つの絵に仕上がるようとした。
  - ・学生の入力結果と解答が常に並ぶようにし、その場で素早く比較できるようにした。また解答は学生の入力とは別色にした。
  - ・確認ポイントに番号を付けて明確化した。
- (4) 授業中は確認シールを受けないと次には進ませない、空き時間に実習した分は、次の授業で確認シールを受けてから次に進むこととした。(3)で述べたような工夫をすると一つの課題の確認は15秒前後ができる。学生の待ち時間は多くても数分、普通は手をあげるとすぐに確認できる程度である。先生が授業中確認に使う時間は、平均すると各時間の半分程度だと思えるが、かなり時間帯によってまちまちとなる。

Information literacy education by the self-studying text.

Mayumi Tanaka and Yukako Matsui  
Kobe Women's Junior College  
4-7-2,nakamachi,minatojima,chuo-ku,Kobe,650-004  
6,Japan

- (5) 学生の起こすトラブルの大半は操作の失敗で画面が予定したものと違ってしまうことである。大きく失敗したとき自分で閉じてやり直せるように課題ファイルには上書き保存の指示を頻繁につけた。また課題ファイルのオリジナルから一部分だけを持ってきて貼り付けて直すなどは先生が行うが、単純にテキストを読み直せば学生自身ができる場合は読むべきテキストの場所を指示し自分で直させた。
- (6) 進度が遅れてきた学生には進度確認カードに付箋をつけて個人的に知らせ空き時間にも実習させるなどして頑張らせた。
- (7) タイプや技巧などの実技試験はそれぞれ2回行い、1回目の試験に欠席したり、不合格でも2回目に合格できれば良しとした。

#### 4. 自習形式で行った結果

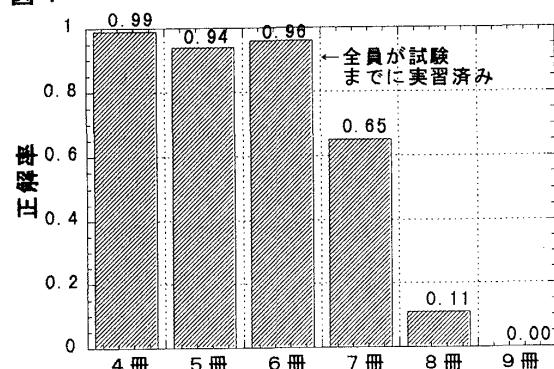
##### (1) 学生の取り組み

授業が始まって教室に行くと多くの学生は自分で実習を進めているようになっていった。はじめの頃は読んでも分からないと言っていた学生からも「よまなあかんな」といった声が聞かれるようになった。

タイピングはほとんどが空き時間を使っての練習だが、タイプ試験終了時の全学生のローマ字練習結果の平均は80文字/分だった。

##### (2) 技巧試験の結果

図1 技巧試験結果 98年度前期

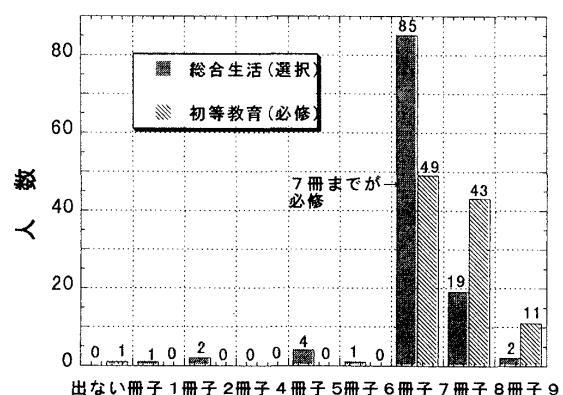


最後の授業で行った技巧試験の結果が図1である。試験は各問い合わせやすく答えていかないと最後までは進めない量である。学生には文字入力が主である6冊目までを済ませておくよう指示し、テキストの持ち込みは可とした。この結果から自分で一度実習した範囲はほぼ身に付いていることがわかった。

##### (3) 到達度

半期で学生が到達したテキストを図2で示す。7冊目までを必修8冊目以降は自由とした。授業終了時点では7冊目に入っていた学生は全体の1/3弱だが、単位を取得した全員が終了後空き時間を使って7冊目までをませている。この結果から学生が自分で読みながら課題ができるようになったことがわかった。7冊までの達成率は、必修である初等教育学科で99%、選択である総合生活学科で93%だった。

図2 到達したテキスト 98年度前期



#### 5. 自習形式の今後の課題

一部の操作（特にタイプ操作など）は動画教材の助けが有効であり。使えるようにしたい。

さらに、操作を自習教材で学ばせることは、ほぼできるようになったので、次のステップとして、原理的な理解を含んだ、より高度な概念を自習教材で獲得できるようにしたい。